

越中の俳諧一枚摺

Etchuu no Haikai Ichimai Zuri

大西紀夫

OONISHI Norio

一 『応響雜記』にみる俳諧一枚摺

歳旦吟等を摺物として親しい人や仲間配つたいいわゆる俳諧一枚摺が盛んになるのは、越中では江戸時代後期である。この俳諧一枚摺流行現象を見るために、氷見の田中屋権右衛門（俳号水哉）の日記『応響雜記』の中で、俳諧一枚摺に関する記事を抜き出してみたい。

文政十年閏六月二十日

十丈子方大聖寺呼亭と申人より、紙面一封到来仕居候二付、指出候所、拙方江も一封、十丈子の紙面中に封し込有之、右は大聖寺二而、二見屋作蔵と申人、拙方江の文通始而二御座候。ほ句筆末に記有之ル。

(中略)

右の外二すりもの一葉来ル。

注 氷見に来遊中の十丈園十丈へ大聖寺の呼亭からの書簡が届き、その返書に十丈は権右衛門のことを紹介したのか、これより権右衛門と呼亭の文通が始まった。呼亭の書簡にはすりもの一葉も同封されていた。なお呼亭は二見屋作蔵と称した。ちなみに呼亭は十丈編の『十丈園筆記』（文政年間刊）や『喜春楽』（弘化5）『かれぎく集』（嘉永6）所収の俳人である。

文政十年九月五日

十丈子客中相催候すりもの、夫々配当仕候。

注 十丈園十丈はこの年五月二十八日に氷見に行脚し、七月下旬まで滞在している。この摺物に掲載された権右衛門の発句は、「灯籠やともすもけすも草の陰」であった（『其年布理』―田中屋権右衛門の自撰句集 拙稿『秋桜』第十三号）。

文政十一年四月三日

京都菊平方江、あつらひ置申候すりもの到来。尤、愚人一人の興行。六根によするほ句。

眼 世に飽くは人の恥なり紅牡丹

耳 蝙蝠や寂しき音を軒の裏

鼻 座隣へ馴れよき袖の花袖哉

舌 青梅や雨の残りも味の数

身 蝶鳥はさわかしからす麦の秋

意 無くならぬ芸ともなりてけしの花

右数、六十葉出来、画自作、鉢の月、追々連中へ配り申候事。

注 菊平は京都の出版書肆菊屋平兵衛。菊平は俳書の出版だけでなく、俳諧一枚摺も扱った。

文政十二年十月二十九日

富山、萩田喜平方へ、すりものあつらひ置候分、到来に付、夫々配申候。画ハ落葉なり。小子画し申候。ほ句ハ不記。

注 萩田は萩田の誤か。富山の版木師は代々萩田家である。文政二年刊『葛の実』を出した版木師萩田一蓬という人がいる。

文政十二年十二月十三日

蕉夢と申人より、栗柿集到来。杉木出町、蓼牙と申人より、すりもの到来。右、兩人始而文通なり。

注 出町の蓼牙は小幡小左エ門（『海内千家集』）。

文政十二年十二月二十八日

富山あふむ子より、すりもの到来。

注 富山の俳人あふむは文政年間の人。『応響雜記』によると、浅尾多聞と称した人。

天保三年六月十三日

本吉明翫屋嘉蔵子より文通。すりもの一葉到来仕候。文通の句。

吹つけて螢の照らす簾哉 春輝事春奇

夕かほや空錠なから門一ツ

役筋の提灯にして涼納けり

など二御座候。

注 加賀の元吉の明翫屋嘉蔵は春輝と号し、他に春奇と号した。

天保三年九月九日

済美公、瑠球公、竹老公、六葉公等五人にて興行すりもの出来、到来仕

候。尤、一画は敬周にて、千本しめじ也。ほ句ハ、江路庵にての、探題の

句なり。

注 この摺物は済美、瑠球、竹老、六葉と権右衛の五人で興行した俳諧と江路庵での

探題の発句を載せたものであった。絵は高岡の絵師堀敬周が描いたものであった。

俳句も嗜んだ四条派の絵師敬周が描いた俳諧一枚摺は架蔵にも一枚ある。なお江路

庵での探題の発句というのは、『応響雜記』によると前月の十八日に詠まれたもので

ある。江路庵主で主催者は竹老（日名田屋伊兵衛）であった。竹老は先代の馬十の

後を継いでいた。済美は松村屋仁左衛門、瑠球は菓子屋清兵衛、六葉は紺屋伊佐衛門

の俳号。

天保五年十月八日

六葉子方より、去冬已来、尾張滞留中の諸先生の短冊、書画帖、すりもの持参の品見せに遣され候二付、拔写置。

雨白うあたるや蓮の花に葉に イセ 菊所

（以下略）

注 前年、六葉が尾張滞在中に得た俳人達の摺物を見せられたのである。

天保六年十二月十五日

富山はん臣、萩田喜兵衛方江、すりもの頼遣候。返書二、同人方隠居、

ほ句。

飯粒の封しめ高きさふさかな 復亭

鰻汁や煮えこほれて物をしみ

埋火やこほれて有し茶のけふる

注 「富山はん臣」は板木師のことか。萩田喜兵衛の隠居は復亭と号し、俳諧を嗜んだ。『己之中集』（天保4）に発句を載せる。文政十二年十一月二十九日の萩田

喜平の跡を継いだのが、喜兵衛か。復亭は萩田喜平か。

天保六年十二月晦日

七ツ頃、富山西町、萩田喜兵衛方よりすりもの到来。夫々、配り申候。

注 十二月十五日に注文したものが、半月で届いたのである。

天保七年正月元日

すりもの加入の句。

雑煮出す客歎と覗く内儀哉

自分

○

御降の晴れて聞よき雫かな

見た跡は忘れたようにはつ曆

注 これは前年十二月晦日に受け取った摺物に載っていた句か。

天保七年正月十五日

村田良助様より、播磨守様方ニ、御興行のすりもの。尤、芝園様の画二而、梅二矢立の図なり。

注 播磨守は、本多政和。加賀藩の老臣本多氏第九代。村田良助は金沢の俳人で、翠台を継承し二世眉山を称する。翠丈、芝園と号し、後に寒余と改号する。画も巧みであった。摺物は本多家で興行されたもので村田良助の画「梅二矢立」が添えられていた。

天保七年十月九日

大聖寺保彦方より、すりもの、たくさく送り呉申候。尤、向円満寺殿より被遣候、右、短冊ハ、

二見浦 おくれしと雲雀も揚る日の出哉 丹嶺

手掬に耳もか、れぬ田植かな 丹嶺

よほど上手と見へ、書も見事ニ御座候。

注 大聖寺保彦という者から摺物を送られた。また大聖寺の俳人丹嶺の短冊も送られた。丹嶺は別号を疎柳園と称し、『独揺集』(安政6)がある。通称麴屋亀一郎。

天保十年正月十四日

昨日承申候句。

すりもの、句

一度出て買揃えけり年の市 六葉

注 六葉は風雅堂を再興した。

天保十一年三月十二日

汲古子より被見候句々

(中略)

外ニ、すりもの、句に、

池に浮て見はやされけり赤椿 梅室

注 汲古は稲積屋六左衛門の俳号。

天保十一年三月二十日

松村屋公にて、興行のすりもの一葉もらい申候。

朝呀のして空近き汐干哉 梅室

注 松村屋公は、松村屋仁左衛門。済美と号する。以下 汲古、素伯、鶯畝、晏

如、六葉ら氷見連中の句が載る

天保十一年五月十九日

六葉子別荘、風雅堂江遊二行、夕方帰宅。六葉子、当五日ニ出立二而、

金沢より富山辺遊行。其内、金沢の尾張町、松田何某と申医師、去冬より、始而、俳諧を執心に相成、初ての発句、「吹雪夜や我家はかりハ世界

かな。といへるを、諸先生感心ゆへ、直ニ、初て俳諧に心さしたる趣を、

前書にて、此句外ニ「ことし田のはつ物なりや取る田螺。」鳴ことに何を蹴ちらすきじの声。已上三句、すりものに出され、当春、見受、大坂の

医者と聞き受け居候所、今度、六葉子、直ニ対話いたされ、左の発句、

持帰られ申候二付、写。芹齋といふ也。

(以下略)

天保十三年一月六日

例歳の通り、堤様御下代、吉田六郎殿口祝ニ招き申候。昼頃入来。七

ツ頃、被帰申候。御同人にすりもの一葉、貫ヒ申候。尤、御仲間のほ句の由、六郎殿ハ、六港と申候。右すりもの、句二、

藪たけのかけを広げて三日の月 蒼虬
星かちに小雨ましりて鹿の声 六港

天保十四年五月晦日

茶屋公江、伏木、能登三より到来の刷物の句、

むら雲を見せて侍すや蜀魂 梅室

子規啼や蛙もしらぬ雨 芭蕉堂 九起

おもひきる折や一声不如帰 能登三弟 和明

注 茶屋公、中村屋徳八郎へ伏木の能登三より送られてきた摺物。伏木の能登三と

は、伏木の船間屋能登屋三右衛門のことか。能登三弟というのは能登屋三右衛門の弟ということか。能登屋に和明と号する俳諧を嗜む人がいたか。和明は『花供養』(天

保13・14・15・弘化2・3)に見える「伏木 和鳴」であろう。

天保十四年十二月二日

風雅堂社中すりもの、内、

吹つけて手燭にもゆる落葉哉 梅室

注 氷見の六葉が、常願寺の隣に再建した風雅堂に集まった俳諧仲間、風雅堂社中の俳諧一枚摺が発行されたのである。

天保十五年一月七日

金沢すりもの二、

声に出て色にハ出す猫の恋 梅室

注 金沢より到来の摺物

天保十五年一月十五日

村田良助様より、試筆の画二葉、すりもの一葉至来。

注 『応響雜記』によると、村田良助は、天保十五年五月二十六日没。行年六十七歳。権右衛門と親密な交流があった。

弘化二年一月六日

土産にもらい候短冊、すりもの等ほ句、左に写ス。

梢たけさす日をうけて雪のハラ 之青

すりもの、句のうち、

秋風の長き寢覚にあまりけり 鳳朗

飛た火のしハらくきえぬ氷哉 梅室

(以下略)

注 以下九起・砺山・有節ら京都の俳人が載る。京都の摺物か。

(以下略)

弘化二年十二月十四日

八ツ頃袴羽織ニ而、御横目助左衛門殿宿小久四へ見廻

申候。留書志賀友之丞殿相見江色々雑談。同人よりほ句帖被預。

尤江戸より到来のすりもの見せられ候内、面白き句々左ニ拔写。

蝶を見てゆけハ足元もつれけり 梅室

さし出した火かけもはしる清水哉 天遊

(以下略)

注 志賀友之丞より見せられた江戸の摺物である。

弘化三年三月二十四日

夏の大すりもの興行仕候二付、探題の発句御座候得共、不面白句々ゆ

へ記不申候。

注 この時の摺物は配布されたのであろう。

弘化三年五月晦日 (金沢) 滞留中すりもの興行。予か句ハ、

水音を明り勝手の夏書哉

弘化三年六月九日 八田屋次兵衛俳号空嗣より、すりもの二葉被送申候

内の句々。

往ぬけて跡見かえるや草茂り 大夢

水ませは用意して有る浮巢哉 梅室

よい風の隣から添ふ蚊遣りかな 空嗣

注 八田屋次兵衛俳号空嗣は八田屋(野村) 円平こと空翠の後継ぎで養子であった。

『応響雜記』によると安政二年十二月、円平に先だつて死去。

弘化三年七月二十九日

金沢 八田屋次兵衛子よりすりもの一葉送られ申候。

わつさりと月影透す一葉かな 大夢

白露を帯て日のある山路かな 理雄

星合や盥の影のうねり合 次兵衛事空嗣

弘化三年八月十日

はつ雁や風は兎もあれ風寒し

右、金沢大夢宗匠すりもの中ノ句。

注 金沢の直山大夢は嘉永五年に『累葉集 初編』を出し、権右衛門に贈っている

(『応響雜記』嘉永5年十二月十八日)。権右衛門も一句載せている。大夢は『累葉集

二編』を安政二年に続刊するものの、三編は募句は行われたものの、結局出版さ

れなかった。そのため、以後の俳壇経営は専ら俳諧一枚摺に頼ることになる(拙稿

「俳書『累葉集』出版事情 槐庵の年刊撰集再刊」『秋桜』第十七号)。

弘化三年八月十八日

金沢より到来のすりもの句々。

岩たりの玉とちりけりけふの月 六葉

秋たつや何とはなしに小楽シミ 梅室

秋の蚊や踏ため壁の溜り水 年風

蝉の声のしまりや窓の月 大夢

朝かほにそなへて有やたはこ盆 梅室

注 金沢より到来の摺物に氷見の六葉も載っていたのである。

弘化四年一月六日

例歳の通り、御師下代西村六郎殿□祝ニ招キ申候。八ツ頃入来、土産

としてすりもの式葉、外に伊勢両宮江奉納の百韻俳諧の集、一冊もらい

申候。(中略) 六郎殿ハ有節の門人ニ而、俳諧至而執心ニ御座候。見せら

れ候句。(中略)

すりもの、句

鞍壺に余所の空まつ時雨哉 有節

又

あらためて照るや今宵八人の月 梅室

月の夜やうかく行け八人の裏 杜鷺

態と来し月もわすれて嵐山 有節

注 西村六郎は伊勢の御師で六川と号する俳諧師でもあった。五仲庵有節の門人で、

嘉永元年十月に来遊した有節に先立って氷見に来遊していた。土産として俳諧一枚

摺を持参していたのである。

弘化四年三月十三日

五ツ頃過御普請所江出役。(中略)屏風二、古キすりもの二当所周泰の句々。日命離宮。

春雨や藪のくるりの夜ハ明て 布世丸

注 以下布世丸の句が四句載る。布世丸、はじめ周泰と号する。七尾屋小右衛門と称す。文政十二年九月二十九日没。御普請所の屏風に張つてあつた古い摺物に布世丸の句が載っていた。

弘化四年六月十一日

金沢二而承候句々、并、此頃中のすりもの句の内等、左二写。

影とも蛭群れるや川の張 梅室

直をまけぬ意地有るうちそ初鱈 ヶ

(以下略)

注 以下、九起・虚白・而后の句を載せる。

弘化四年八月二十日 此頃空嗣よりすりもの送り来候。ほ句の内、

二間三間团扇拾ひに歩行けり 梅室

弘化五年二月朔日

金沢連中当春興行すりもの加入の句、

夜嵐の雨にもならずはつ霞 自分

注 権右衛門の句が金沢連中の摺物に載ることもあつた。

嘉永元年七月二十七日

鶴堂子よりすりもの并文通。

秋たつや空は夏越しの雲はしる 鶴堂

(以下略)

注 鶴堂は六葉の息子の俳号。

嘉永元年八月十八日

七尾より京都五仲庵有節当月下旬高岡江曳杖、其節氷見二而自分方江立寄申度、宜敷社中江伝呉候様文通の端并小摺物の句。

すりもの句 あら磯のはしに一重の木槿哉 有節

しめりある地江水打てほし祭 曲測

注 有節はこの年十月二日に氷見に来遊するが、これに先立って送られて来た手紙に摺物が添えられていたのである。曲測は有節に同行して来遊した。

嘉永二年一月五日

五ツ半頃町方江用事、すりもの師川尻房方等へ行四ツ半帰宿。

注 金沢へ出府中の記事。権右衛門は金沢の南町の版木彫刻師川後屋五左衛門に立ち寄つたのである。川尻房は、俳書の出版だけでなく、俳諧一枚摺も手がけていたので、権右衛門はこれらを見たのであろうか。ちなみに川尻房はこの年は『花の賀集』(江波編)を手がけている。

嘉永三年一月二十九日

京五仲庵より去冬頼遣候すりもの并十二月丁摺到来。すりもの、句。

梅の月居れハ松に隔テけり キイ月虚

(以下略)

注 五月十三日の記事には、「五仲庵月並丁摺三分 到来」とあつて、これは有節に頼んでいて到来した月並丁摺の昨年十二月分の句集である。

嘉永三年八月一日

团扇のすりもの茶屋公等四五輩へ送り来候。

取たかる人を寝させて飛蛭 六川

(以下略)

嘉永四年九月十九日

同人（野乙）橋本喬山より見せ候すりのもの、句の内。

尊さのまさるやしろや梅の花 長大隈守様 蘭堂

注 以下大名達の句が載る。「女中方の句も多し」と記載しているが、省略している。

嘉永五年四月十日

野乙子より見せられ候句々并すりのもの、句

連翹やこ、何処やらの下屋しき 梅通

注 以下京都の俳人達の句を載せる。野乙は高辻屋清八。

安政三年三月二十七日

易年紺六事。すりのもの并紙面。

（中略）

余ハ略。すりのもの、句、別ニ記候句々左に、

うく鳩の一鶯なふる柳かな 有節

注 易年は氷見の俳人。以下京都の俳人達の句が載り、京都の摺物である。

安政四年五月六日

鳥岬と申行脚、今ニ而庵を結び禾汀子へ文通并小すりの一葉送り来

候を見受申候。

賀開庵 蝶鳥もあつまれこ、そ花のもと 梅通

（以下略）

注 鳥岬は越中に来遊し安政三年に『俳諧 多磨比路飛』（玉ひろひ）を出版している。

『応響雑記』の中の俳諧一枚摺の記事は文政十二年四月三日に始まる。

権右衛門は、「六根」の「目・耳・鼻・舌・身・意」に題した発句に「鉢

の木」の自画を添えた一枚摺、六十枚を、京都の俳諧出版書肆、菊屋平兵衛に注文して受け取っている。これを氷見の俳諧連中に配布したようである。

文政十二年十一月二十九日には、富山の萩田喜平に注文している。この萩田は、萩田の誤りであろうか。文政二年刊の『葛の実』を出版した版木師の萩田一蓬敬三という人がいるが、一族か。この萩田家には安政年間に、萩田藤兵衛がいて『俳諧 多磨比路飛』（安政3）や『八重すさび』（安政6）という絵入り俳書を出版している。また天保六年十二月十五日には萩田家の喜兵衛という者にも注文しているが、この人は『狂歌毛毬俵 初編』（月夜房持前気成輯 文政10）の奥付にある彫師の萩田喜兵衛であろう。しかし喜平との関係はよくは分からない。喜兵衛が後嗣であれば、俳諧を嗜む隠居の復亭は喜平のことになる。

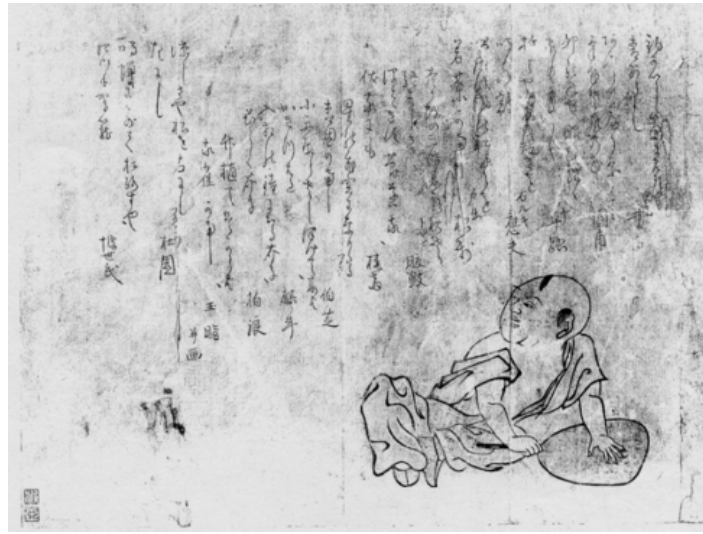
『応響雑記』によると、権右衛門は、天保六年を最後、自ら俳諧一枚摺を注文することはなかったが、これ以後は、氷見や金沢の俳諧連中の摺物に句を載せたようである。そして天保十年以降は専ら権右衛門の所に送られて来たり、目にしたりした摺物の記事である。すなわち金沢より到来した摺物、知り合いから土産としてもらった摺物、江戸や各地より到来の摺物、氷見へ行脚した俳人が持参した摺物などである。特に、その中で注意して書き留めているのは、桜井梅室や氷見に来遊した五仲庵有節や梅通などの句であり、幕末に俳諧一枚摺を積極的に出した金沢の直山大夢等の句である。

二 越中の俳諧一枚摺

次に越中の俳諧一枚摺を数点紹介する。①を除いて多色摺の俳諧一枚摺である。

① 福野 玉脂画(団扇を持つ童子) 文政く天保頃か

縦21・0 糶×横27・8 糶(架蔵)



釣かいし簾に見るや青あらし

中田井梧

あつしいたような気色そ瓜の花

イナミ円甫

卯の花や眼につく家の処く

上ハナ卓路

折くや夜の短きを鳴水鶏

石ルキ応夫

吹戻す風のおもてを若菜かな

戸出松

走り蚊のこえ来る夜そ騒かしき

トヤマ腹鼓

ほと、きす菅草は我伏家にも

椿齋

星の飛空になりたる青田かな

フクノ伯芝

小舟ならさしつけて来よかきつはた

麒麟

入相の鐘にちる芥子ひらく芥子

、柏浪

竹植て是からは家雀かな

、玉脂并画

涼しさや松を右にし左にし

フクミツ杜園

鳴蟬に寄ておろすや四ツ手籠

坡世武

所収俳人所出俳書

・中田 井梧 『己之中集』(天保5)

・富山 腹鼓 『葛の実』(文政2) 『十丈園筆記』(文政頃)

・福野 伯芝 『四時の風』(文化8) 『春事帖』(文化8) 『くさ摘』(文化10)

『苗しろ』(文化11) 『道のともし』(文化12) 『くさ摘』(文化14) 『葛の実』(文政2) 『十丈園筆記』(文政頃) 『雪の五歌仙』(文政12) 『栗柿集』(文政12)

『己之中集』(天保5) 弘化元年五十八歳没。

・麒麟 『花供養』(文政13) 『己之中集』(天保5) 弘化元年五十八歳没。

・中田 井梧 『己之中集』(天保5)

・福野 伯芝 『四時の風』(文化8) 『春事帖』(文化8) 『くさ摘』(文化10)

『苗しろ』(文化11) 『道のともし』(文化12) 『くさ摘』(文化14) 『葛の実』(文政2) 『十丈園筆記』(文政頃) 『雪の五歌仙』(文政12) 『栗柿集』(文政12)

『己之中集』(天保5)

・玉脂 『花供養』(文政11) 『栗柿集』(文政12)

注 絵を描いているのは玉脂という福野の俳人である。この一枚摺の主権者は福野の伯芝であろう。福野の俳書『雪の五歌仙』の連衆である栢浪も参加している。文政頃のものであろうか。

『己之中集』(天保5) 弘化元年五十八歳没。

・中田 井梧 『己之中集』(天保5)

② 越杉木連 天保頃 鳳岳画(甲に刀)

縦19・1糎×横49糎(架蔵)



植たれは買うふりなきはたんかな 素猿

桑たんとつんた上そふはたるかな 太露

はしり行鼠の憎さやはつ鯉 鶯里

くす屋根の一本桐も若葉哉 鶯雪

谷底や声吹あけるほと、きす 梅園

根切してはや庭仕事麦の秋 霞村

舞蝶とひとつに落る芥子の花 荷月

堅田にも鳶の絶たる青田かな 嵐汐

片たすきかけて走るや鯉うり 栗溪

松笠の落てとばしる清水哉 直海

捨舟の中にさかりのかきつばた 可梁

せり合てほたる流すや橋の下 北昌

南天の花に宿とれ雨の蝶 少年晴峨

伐込し宿り木までも若葉哉 みちを

郭公啼て位のつく林かな 其雪

唐紙の墨陰涼しき広間哉 素雀

車牛類振坂のあつさ哉 帶露

打つける雨に匂ふや桐の花 巨淵

○ 思ふより夜は明やすし田燕 ノシリ梅素

風の夜は草に集るほたるかな 中カミ梅隣

鐘持の身の振もよき裕かな フクミツ幹古

明やすき夜を触て行鳥かな 粹夫

碁の工夫振り詰たる扇かな

秀枝

立山の雪尚高し若楓

正名

高過て盛りしらぬや桐の花

鳳沖

越杉木連

所収俳人所出俳書

太蔭 杉木 『追福集二』(天保14) 『四時行』(嘉永3) 『花の賀』(嘉永

5) 『龍か岡』(嘉永6) 『多磨比路飛』(安政3)

鶯里 杉木 『追福集二』(天保14)

梅園 杉木 『追福集二』(天保14)

嵐汐 杉木 『追福集二』(天保14) 『四時行』(嘉永3)

素雀 杉木 『追福集二』(天保14)

巨淵 杉木 『花供養』(天保4) 『追福集二』(天保14) 『四時行』(嘉永

3) 虚淵 『多磨比路飛』(安政3)

梅素 ノジリ 『花供養』(天保4)

幹古 福光 『花供養』(天保4)

秀枝 杉木 『追福集二』(天保14)

正名(まさな) 杉木 『追福集二』(天保14) 『十丈園筆記』

注 杉木は現在の礪波市。近隣の中神村・野尻・福光の俳人を載せている。絵師

は鳳岳である。絵入俳書『たまひろい』(安政1)で能登の名所を描いた金沢の

絵師棟窓軒鳳岳である。

③ 甲子の春(元治元年) 城端 翠厓(大黒天と打出の小槌)

縦18・4糎×横35・2糎(架蔵)



撫られてほろ酔さます柳かな 大夢

蓬萊や松に延添ふ海老の髯 丘湖

香に曇る風情もあるや梅の月 楓跡

書初や手にも添たき親こゝろ 蓑水

福曳や綱うたがひも慾のはし 可順

蓬萊にしはく居るや朝こゝろ 里暁

元日や居たなりに時うつる 北来

はつ鶏を耳に嬉しき起ちから 斗玉

さし汐の廣ふ見へけり春の月 八谷

初鶏の声に浮世の浪静か 梅枝

はつ鶏や春を備への声配り 北ノ一花

蓬萊を敬ひ腰の往来かな 石溪

おなじ事聞も聞よき御慶かな 波寿

恵方から手元明るし筆はしめ 登美女

出る日に高ふる梅の薫りかな 健斎

甲子の春

所収俳人所出俳書

蓑水 城端 『麻頭巾集』(安政4)

斗玉 城端 『麻頭巾集』(安政4)

一花 北野 『累葉集』(安政2) 『藁とじ』(安政6)

健斎 城端 『麻頭巾集』(安政4) 『藁とじ』(安政6)

注 主催者は城端の健斎である。城端の蓑水・斗玉と北野の一花がいる。これ以

外はこの一枚摺でしか見ない俳人である。絵を描いているのは、金沢の絵師で池田九華の弟子の田代翠厓である。大黒天の打出の小槌は大槌になっていて、小さくなった大黒天がそれに乗っている滑稽な絵である。

④ 明治元年 辰如月 越中連 東雨画「菜の花に胡蝶」

38・8 糶×13・0 糶(架蔵)



野は暮て梅にほひの戻りけり

悠平更雪袋

ぬる、ほと降らぬ雨也啼蛙

羅叟

菜の花の上はふ庵のけふりかな

杜丈

かけろふや洗て立し竹箒

稻花

人声の野にくれのこるひかん哉

柳風

つかくと見による水や春の月

水慶

瀬にむかふ力は見えすはつ川図

樹月

かけろふや出水曳たる芝の上

清亭

雨の日はかね哀なるひがんな

味一

十粒ほとこほる、雨やはつ蛙

早芳

野は人の出て来るはつよ初桜	鍊石
うれしけに飛やひがん放し鳥	素亭
傘はりの氣遣ふ空や啼川囀	帶雨
地しめりの乾く日かけや初さくら	杜甫
行鳥にはるも付行おもひ哉	春漲
松かけの只しつかなり春の月	青嵐
陽炎のもえ尽しけり人待間	野鶴
帰鳥春に淋しき詠かな	亀雪
彼岸から置処かえし時計哉	為積
海面に鳥うく日や初桜	正山
豆腐うる里のひろさやはつ桜	壽賢
水にさす影見初るや春の月	甘葉
啼初てなかぬ夜はなき蛙哉	晴堅
一流れ雲の名残や帰る鳥	葭風
鐘聞かぬ鹿もひかんの角落し	甫随
春の月影ひく草もなかりけり	雪巒
よりかゝる垣のしめりや春の月	為章

辰如月

越中連

所収俳人所出俳書

・杜丈 狐鳥 『麻頭巾』 (安政4) 『浪化上人発句集』 (元治元)
・水慶 出町 『麻頭巾』 (安政4) 『浪化上人発句集』 (元治元)
・鍊石 『藁とじ』 乙』 (安政6)
・帶雨 高岡 『花供養』 (慶応3) 『なみのはな』 (慶応4) 『浪化上人発句集』 (元治元)
・青嵐 日詰 『浪化上人発句集』 (元治元)
・亀雪 出町 『藁とじ』 甲』 『藁とじ』 乙』 (安政6) 『麻頭巾』 (安政4)
・為積 出町 『麻頭巾』 (安政4) 『藁とじ』 甲』 (安政5) 『浪化上人発句集』 (元治元)
・正山 岩瀬 『藁とじ』 甲』 (安政5) 『藁とじ』 乙』 (安政6) 『浪化上人発句集』 (元治元)
・甫随 杉木 『麻頭巾』 (安政4) 『藁とじ』 甲』 (安政5) 『藁とじ』 乙』 (安政6) 『麻頭巾』 (安政4) 『浪化上人発句集』 (元治元)
・雪巒 出町 『麻頭巾』 (安政4) 『浪化上人発句集』 (元治元)

注 主催者は金沢の後藤雪袋と高岡の幸塚野鶴である。雪袋はこの年、明治元年の悠平から雪袋に改号したか。

【参考文献】

『越中俳諧史』 蔵巨水著 桂書房一九九二年
『江戸文学』 第二五号、ペリカン社 二〇〇二年六月
『文学』 岩波書店 二〇〇五年三・四月号